梅兒譽美

三編

中

207
60
2829

国立国会図書館　タイトル『春色梅暦 4編12巻』 請求記号 207-2829　ガラス使用

春色梅兒誉美卷の八

江戸　狂訓亭主人著

第十五齣

東京都立図書館

任ハ鰒ニ花の誘も今ハ城の並家鄙ふ雅人形乃
姿ふ隠ゝ紀美婦人の隣垣歩行ゝ梅ゞ香の傳ふ堤の
春の風竹屋も呼ぶく向嶋自由自在の釜の湯ゞ風雅と洒
落ゝ茶會亭ふ何某隠居何の寮と槙木の垣根建仁寺
栄の戸編ゝく鶯の声うゝ〳〵き彷日乃朝湯ゞ出る我自

慢とハいひながら開けぬ片折戸寄と立出れバそこが直に宮
尓霊敬をこがせし名ある薄氷駒下駄かくも田甫座敷さし
言ぬ左り褄を小梅わたりの名ある娘通ひ稽古の朝ぐり
呼かへせど止らぬハ根下駄鴻田の当世風品やかましいかの
づかしい江戸者の隅田川呑明しなる平伊輪の庭下駄さへ
よく本場の藤兵衛幸冨久寺の垣ねそひ朝湯の出来ねを
口小言 米「どうもこっちハ理だけれど朝ハ湯へ這入て行ねへ
うちハ亭主がせる故へ つまづかしい 桜川由次郎
由「モシどふも湯も甚

質が一番よふございますね 今朝ハお前さんよくて夜ルも眼が
さめやくさめまして 子 米「春秋までおけれど森りハして出へ
ものゆへ時に湯ハ出来まさろうう 由「モウ沸きやしあろうその筈
りきご女湯が頂顔へごろ/\すると往眼縁の寒
しや 若が相ゆへ小浴衣を若して来て今朝ハ化粧をするのも
小鬢で私で岩へ帰りぐる又/\ぐんぞといつて居ても甘い流
し袋耀ぐてけのしく居ませうぜたけへきます 米「とのふのま
仮名実を其の養者がお前への書衣見ずくまや由さんお前も

由「ハイ方々へ何処へお出ぐらさいな。梅
い様へとゝろまる法りで円の湯を待うるゝぐまつ〳〵我
引出〳〵やうまくゝ由「ナニうまく〳〵様へまゝ素人おそそふ女ホの
ろけもまゝ〳〵茂「イヤうんで桜川吉孝の恩ゑぐも
女ぎまゝとゝかゝ雑人ハあるめへトひるぐうむさーやの向ふの
湯の姿へ来るとりめう湯やのまゝうぐと居いづゝ言れか
若気盛湯わりまでぐき桜色年ふゝ〳〵ふ十六七ぞ門
とまるやどゝ〳〵〳〵き姿もまゝぐか智りゝ病療養の細帯ゑ

拭ひ紙ホ今ゝいと少さ花英本の指〳〵礼まてるびん
のかつまゝ紙ゝきゑでぐゝ茂ゝ茂ゝと奥又金毛ぐ門ゝり
〳〵「ヨヤ茂さん茂「ヨヤぐまでとまの門さゝ蝶ぐゝ光く
久〳〵あゝゑゝうちゝん遠へるゝふたゝきゝゝそ〳〵くマア
何処へ居るのぐエト。ゝまぐまりて茂べゑぐゝのゝん世門めゝ
ゝくきゝと由ゝゝ茂べゑぐせゝゝ紙ゝきゝ
由「他のことゝりゝぐ門の落度サく言ゝふゝんゝぐエヘトかぐ
ゝく茂「由「ゝの通所へぐも上山田のゝ妹「イ〳〵エ小梅の姉さん
ぐゝぐゝくゝこの横町の家へすゝく茂まゝゝゝ茂処へまつて

を居りまするヨト云とぐまりて此一の中桜川由次郎をまぐと
云へ湯ゐ這入りまづとうりと月とくく「旦那さまゆる
つくあうんと月やまとぜト笑ひるぐ〜湯屋の障子をわけま
で袋屋の清わさ元ゆるぐとりとまづきそ例るを持つぐ
門ぐ〜発出を小童「こちやゆまやせねうまやせね「妻清
ゐ拾ばまるやッサトひるぐ〜看物拾ぐ出格子元蛇流
を月まべ板の元まくして井戸ぐの如く通例より少き
渦桶ゐきひうけの様袋をうけ紅梅の小枝ぐのまくわるを

風呂の中元ゐる小児のいぐ〜ゐるぐ〜事同舎く
亦あのづ〜風流ゐ江戸の湯屋元絶くゐるぐ〜「三ぐ
まと元遠くゐる元ト「ひ湯ゐ這入る折ゐ表むゐやの
垣根よりその女湯ゐ覗こぐ出を横町ゐ行ゐ
出合あつまゐ「ヨヤく能所ぐ逢
今日もまとぐ出をとるとゐでゐあつサヤく一同ゐ湯つく
「ヨヤ母出ゐ〜〜「ナニぐ〜〜コレ
然ゐぐんゐる庵ゐ〜ゐ姉出ぐ宿まで二三日間とゐ

国立国会図書館　タイトル『春色梅暦 4編12巻』 請求記号 207-2829　ガラス使用

あるとのうちとも産婆の日剃髪を見番頭ひの屋敷へ
降りみてもさて種金コウ山歩やこと歩で十日の人余り橋
ちまたくつまるものゝ今日で幾日望をたとゝぶとゝやゝ医者
ぞの〳〵茶れよ彩るこの保里の内へ出張出行てゞ死ぶやそこの
と延引てこひど止宿ゝまちやゝ甚方の物良ようゝうが
山方の復ゞ日ゞ小ゝアサリく直ぶ連く帰るト高りる
悪業ゞ拝見お帳ゝとゝ蝶へ去きぶ延引ゝまゝ〳〵ぶ看病
やそ名〳〵ゞもせんゝ拝く
る伯母さんゞ両三日の中に来るゞ〳〵ゞゞそれゝそ

イくヤゝゝ後へ途方も種へトべゝさのゝくよりゝ「コウおぎきんゝ八
掛合く連く行おちゝとゝゝろゝゝ種へゞこのゝ八ゝどもゝてゞゝゝ姉ゝとゝゝぶ
さんハ茂〳〵月日ゝゝ知ゝ種へゞ唐琴屋の二階ゝゝゝゝゝ
人ぶ知ゝゝて茂ゝ来紋日物日も相変ぶゝて来ゝコウ山系
ゞ産業でハ随分かゝゞぎを沢山さゝてせ「りんよあゝゝ木
場の旦那茂〳〵ゝ旦那ゝゝゝハゝ蝶ハゝゝゝの元主
人ゝゝ産ゝんゞゝいぎゝゝゝくゝゞもとゝ経ゝあゝら

あんまり冥利がよくハあるめへトいろ〳〵とくどくまゝ婆ア
ゆく〳〵ひるゝそ月ゝえ〳〵りゝが元ゝを多くゝ蔵ゝ清よりひ多モシ
ゝめへさんハこのゝの世話ぐもゝさるゝきでゝ出信切よりつゝ〳〵ゝ
のゝまえゝをゝもゝくゝも今ゝどやア〳〵ゝどひゝ潜ゝづゝぐく春夏
親子ゝまゝゝの時ハ抱ゝの本公人ゝゝも一切ゝゝ〳〵ゝらゝまゝゝ
ゝのゝぐく身ゝりゝ渡〳〵ゝ二十両浪雑用ゝりゝ元利の金ゝ
すゝりゝをゝつく返ゝゝ絶文をゝあゝのゝやゝ〳〵ゝこれゝゝ
いゝやゝ〳〵く密男ゝあるゝりゝ出勘弁ゝのゝゝト蔵ゝゝ

一言ゝこゝ〳〵ゝゝるゝまゝゝゝゝ〳〵ゝゝゝゝゝゝ性の寛活富
仁者ゝも蔵ゝゝゝゝゝ途中で出合〳〵ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
蔵
コウゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
母ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
実ハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
湯ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

いく処へ来ると女の耳ふかとよせるのゆうさま
ちがひ夫そうくうの出てゐく　蔵「蔵さんまそこふかを来の
毒でござりやすとのりくしてゐる風なようハ　由「旦那ようくハモウ
あがりやうをゼ　蔵「ヲイ由孝チット面倒かてことが出来くきてゞマア
あくア湯ハ後ようやうヨトいところくるいぢんの女のこふ色こうしの紙
めおくるよ　蔵「サアいづまとおれが仲人まるくやるやうこ二日こまで
ひのべ日延をかト　蔵「イエナニ是ゞやアあること
おるハころふろうこと
来の毒ゞナニこと　こうでも理さこ　こうこ　ハ何もをうやう
やくいふ氣ハおがりませんが　蔵「トうくサくいづれ再もおれが
のこと天に込ゞかく両方の為ふこるアくく極　トおくまをびおひたこひお嫁
ぎ祝い嫁　とつまくひくいこのまれ
ようはれば「ままふマアひとんかことでおまの毒か。どうゞ出堪忍
きこうして　蔵「ふ法ようく極　おやまるこけも極　さゞあてこ嫁
もこゞうくうが山方が氣ゞくアお河ひくくこ系ゞでも見をつさ
おこの如の来ゞくア極こうこ何でも元こ人の娘のおこ
をあんありこのくこ仕方ゞくく持ゞこの病ふさこくいくゞる
世話式やく氣ふこうくゞマアどうくこ理合で今の方ようこ
のゞこト○問ようくお蝶ハ涙こうゞくく此草紙の初編二編ふ記

せーでときこまの上をくーくくるるせべこれ来富福の寛活ひろ
ね氣性の男達小梅のお由ぐ仁使の嘆よ軽さう捨てる見間
氣の合ーも縁の糸こと知るもども蔭ゑれぐ「そりやアマア
そんど共男るの方のうべ可愛そうふたーー業ー縁ぐいて
これ見ようおまぐ姉出ふ由くどうる波ことぐ方とう離てやろん
トいつちゃ「コウお飯とちやく持くく来の出方ハぐ出ふふ
ちゃと待きる
ちゃ飯の方ぐよろうトキニ由業ぐ牛の虫前
ちゃの所ふ「そうるるぐろういアコるくこ氣どつくこづを

法ありぐのちやく呼ぐこんナ「ハイくト勝吏「お敬を
いーーまそう「ナニくーーのるぐふ出ふ飯とちやく捨てさくく
ふか姉さんぐ業ーて居るぐろう「妹「イエナニ上寿寿のの
親師さ直ふ来ーく帰る法のりふそうこちくまるさ
のー「ナニ朝湯のー婦業ーー直ゆ「妹「イエエナニ出ちたのの
アりお屋業の陽の「ウくやーーなりふ小梅の瓦と焼ちゃ前ぐの
ちーーそれでも金稼ぐるの「妹「三町ぐりりませうぐ山別
ふで「家人隣家「ぐるるよ思ーくく居りまるョ

新くに見よう〳〵とおぼ〳〵く酒宴あり て後由へ見れば今見へ少
しの中おひるを載いてもよろ〳〵うごゝいあせうう 義へて白せ
どこ
約束で約束あるのう 由へイエ 鯉大と家利屋と私と一集ふ
きるおぼ〳〵きづあるのう〳〵と此月中のう里八ゞやく〳〵とい〳〵
おう〳〵 義へハアそのうそんるう〳〵てうどつくおもも屋敷の中月
ゞあるのう今見へ一日おゞのふるう〳〵ふモウいのう直ふ行神へ
由へイエマアおるるう〳〵でもよろ〳〵う 義へ十〳〵おももモウ家
をとらけるのう〳〵よそののう一すひとふおるのゞゞゞをこのう

向へ家如く漢の家の川岸へ言傳とゝゝう神へ 由へイ
延津賀さんの面ぐゞゞいおもろ 義へそうサく 実様見
岡遠ひのく来るのうふをゝその家戸川のも浅もるおゞ
ゞゝるゝるのう一所ふさゝうく川岸〳〵私で来て今ゝう
とゝうくうんの 由へイのう〳〵ゝおりゝおうんのう 義へ見れ
く歌ゞりふイヤ嫁さん出ゆりとトゝ義へ見ゞゞゞ出ゞ
よゞ義へコウく悪推ゞりせゞと演の家へおくうんのよ
義へ土産のう向へ見ゝうハ渡りゝ〳〵ゞイ来会とゝ様を

[illegible]ちやうりの[illegible]ゼ　田　ナニ法[illegible]
出来だろうで案切[illegible]の浅イエ　向島も自由ハ自由ハ
今りやうしこそ渡り船の舟が今ごろ六人ぐらいぐらい渡
しゝ中[illegible]　荷　こうく実つの船人の数まだ[illegible]
うんざ昨今中ごろ竹屋を呼ぶ声と拍しさんざつけ[illegible]
ゆう芸人よりつと白毛人家歌ふ○金剛[illegible]　当時のとき人と
須田堤立法[illegible]ほど此[illegible]
[illegible]この竹屋のまさきさてもだ[illegible]

荷　この寄も今ちこ[illegible]ちるとおもふ山岩母成[illegible]
て姫[illegible]　重切[illegible]須の風情を[illegible]
[illegible]りやとイヤとまたちやう出舟のの[illegible]サ　由
いつを今見ハよう[illegible]　荷　[illegible]
[illegible]ふ[illegible]で浅草を[illegible]
ハぢと早く[illegible]　由　さあうあつぶ[illegible]
ようトと立ちる[illegible]出ぢの市戸の[illegible]男　[illegible]
ぶんとうヘイさあうあつヨヤ由さんだりお帰りのう立[illegible]

お路「そうよ」女「どうりでどこかへ行けかと思ひました」
つく「且那様帰りしまゝと置こうか」女「ヨヤマア
あなたまた」「うちぶかのこどもろう」女「若さんエ由さんがあん
かてのまゝとまゝとかいつけるまゝ」時「春正月十日あまり九
こゝ南枝やうく〳〵かとろぶる梅暦のこゝろかを宝
福寺九巳の時の達ボウ〳〵り反焼烟霞と倡ふ
うまく消入ら戸ふ汙瓦揚の材木の寄せ風のアル寒へ
ス遠ふ宣使を着わらの見ぢるブウり〳〵

第十六齣

さそも小梅の里に住〳〵於由さそ久〳〵く商家て渕寄の
邑の伯母ゆり〳〵寡婦の宅を仮住居郷主の伯母を古
郷の本家ふ拠ゆき用ゆりて山程郷ふあらざるべ留主
居ごゝろの出来生今見ハ少〳〵商家の暮り〳〵出来
物成ゆく〳〵蔦の物の本開く〳〵両戸ふ春の日の閑和
ゆるハ蔭うゝ障子の梅の輝ふ月もさゝぐ女のこゝろ
を思ひ出ぐ〳〵偉〳〵とゝろとゝ鳴達ハ金龍山の

己の財産を耕地を通る商人の声
向酒〳〵引
幸ようめん〳〵。本籍ひびきて遠ひきこゆる折こそ
あるとか蝶八本場の蕎麦屋ハ連ちく竹垣の閑戸
ゆく蝶〳〵姉さん来るを何ともなく帰りがつもとり
おそうめんそうそうトひろて這入中戸口蕎麦ハむすび
蝶〳〵マアこゝへおよりなすりくださいまし〳〵と奥へ
行おつゝハ蕎麦屋ハ訳なくたゝ〳〵けれバ「フウム
そうゝそれハマア出信切ハ出ごさいてこゝらへ
お通〳〵中か妹〳〵ハイトお蝶もうまつげハ次のるへ立出
蝶〳〵蕎麦さんどうぞこちらへお出なさいまし蕎麦屋ようく
の悪いハ由〳〵イエナニ今貝モウ来ハよろしうございます
出遠慮なさいませんでどうぞこちらへ乱〳〵とまし
ゆうお出迎ひ中ませんコウお蝶ばうヤそこへ来くマア
お蝶の支度でもあ〳〵ヨ蕎〳〵イエ〳〵あの多ひ来ましたか
トあのきれ〳〵かぐらお由ゲ屋蕎麦〳〵出発ト屋ハ
つけばまづこちらへと上の座へ来くとびハ奥見合

いとぶうきき風情ありしがお由を掏盗仲間にまぎれ常
五郎作事形く深ぐさ「あれ〳〵うち七年以前佐
倉の宿の越屋の宅より成田参りの出掛で〳〵りんが
そうぐうけ降込まてこの夫二階酒の相手と彩んぐ
ぜづくもめへの雅義と為〳〵くりんよその時わかさ
大伯母ぜんぜ為て義外見姫の押掛喧嘩
りんのそうの強義者とうぐ身でさも私うく男ふ
うさくふ浮名紙立まさぐまわくこでございま

せうとも性根しさのが縁と為〳〵く義〳〵あつかたぐこと
為〳〵ぐまんざまの行の身でありしが絶ぐ法ありい
當産情由一江戸で逢つてと為つ〳〵門〳〵義楽〳〵
してその後ハうぐと音隠の後客の中でたぐ色
いと知りつ後〳〵帰るとうこと味線捨く結へ女
髪結と為つこのハ第一まま〳〵さんと逢さ河浮為活
業いて〳〵中ね男の横槍ハ粗のりとりふも仕
まいとハ自惚るてこ操こと〳〵ぐどうぐ中推量事門く

てごさるのまう〜と誠にわうもの由が風情なれば余所ら、
ちんりよ
まさてあるまさる海の服元言葉うどりらねいあるいあるまさる
きけの
情の色香粹が程嘉〜知ふ世蔵多あるも蔵へりんふ
マア夢と見るやうに私しらご佐倉で逢さその時さ
しうあるあ八十九の年で厄年ごろ成田さ行く糸
読ふ約路次親子連の旅暮ぐさとゆくさふ蔵
情の風ふ吹流さてさすさ〜と名ものの知よ蔵
もれも立流が産愛の色〜トいろまく知よ〜八

まろこりまさひらまさ〜そうふ由アアマアあくらふい七
年紀もその調子の姉〜ごな真ふうけて今日
中ごく言〜さ知の操有ごさ迷惑とあるべごうが
どうぞ四んまん〜くまんまさひまいあごうとりまんえ
二人ふ書ふ由ふ似合ねその風情こさ世の中の女の情ふ
くよ紀もわ〜きも強きも弱きもこさとさであるさふ
あ〜その逢方の男まごでもさ言ちまさも年増
者のおごふあるわり年増まくうまごうまき増

姿もこゝろ男とゝのへよりそのときのうつり香
ゝく更ふかゝるの評判を世間と律義のうゝとこ
ろそ男女の情をゝくしたゝとゝ（茂八十二歳忠）
ゝふ世ゝ方でいゝそゝ成田ゝゝ帰ゝと直ふ同もゝく大和
めぐりふ友達ゝ紛ゝとゝより好のゝ屋敷親ゝりでゝ
やゝゝゝ我経通知のゝゝけ癖同氣ゝゝゝと達の
浮藻連中の長崎ふ阿房ゝゝして伊勢温泉京
の女郎で長崎の味も京都見物ゝゝとゝゝ

あゝゝの月と見ふ江戸でゝ大変の仮文の高名ゝ
立中出入のゝ屋敷を五軒までもゝくゝりゝ出来て
出来上ゝゝも知ゝゝふ道中根掘ゝゝゝその私
ゝ情ゝゝくゝゝゝ金の工面ふ高ふ中金出入の
中金郎老（十両二十両と金の借ゝ十七八侯ゝゝ
残らゝ江戸（知ゝ金と出ゝゝて掘ゝゝゝ西里
二百里遠所ふ居ゝ親ゝゝ郎ゝゝ不孝と
いゝゝゝゝの仇文のゝんゝふ葬式の借ゝゝゝ掘

平兼盛

我宿は
梅の立枝や
月と月ゝん
思ひの外に
思ひの
きまを歌

千葉の藤兵衛

小梅の於由

国立国会図書館　タイトル『春色梅暦 4編12巻』 請求記号 207-2829　ガラス使用

置と世話をもやうやく不承承一伯母へ渡せといふ
も元伯母とつゝく亦分の娘で母の姉義理ある中
の云ひけと内評定がありとも知らぬ程び借でも江
戸入のその日ふ直ふ内ら動当ちぐらく上場の新
類へ移けうまく居ち時分あるのを取折ふ思ひ
出すとも仕方ふ一そまつゝ二年程ちく
宅へ帰ることろがあるの取づまた事ふいろく
さぐらく尋ねけまどゆくもあまびとあまりさぐ
実ふ手ちまるつ尋ねるの由へどうつもぐちあまるの
ちぐをありまゝ通へあまつゝ佐倉成事ふ兄門へ
行く東の方を出ふく江戸へ帰ると父親ひよ
ちつちやく宅へ帰りとあり聞くまつさの
かりとゝゝ風邪とひつく病ねり父親が亦好つう
しくやうゝ六七十日ちぐく宅へ帰りまへえん
のゝ成ひろゝと号成やのくもぐうゝてもさりぽう
つちゝぶふちまりくその中もとぽんも亡後伯母の

世話ぐやうく〜と〜て居るも蔵者や何うで
ゆと時とは第一あるべさんあるかと時は自の
やうな男〜にてはとあり門に義相手の髪結ハた
うないけまど女の身で男の世話ふとはいかとろの藤ハ
第様こ〜らくきうり 妹 「姉さんエもう来が出来まし
しづ子おう来第まが 由 「りんがあるゆく何もあいま 妹 「いろ
もの物でもふるく来りやせうろ 由 「アそんなもの〜ぞ
行くまくまくあるか 秋 「来さるやの裏門戸ぬけぞふ

もさーやの横ふ戸真ちぐふ行くと近いそうざよ 妹 「アイ
山ゆるもそう通りく行きまーさどち〜戸賢くまるね
ろうう子 夜 「ナニ〜日さーハモウおうひ自さんかそれろう
今ふ知ろうとが何う拾く来るまづざ 由 「ヨやそうでお
さいまそ行くそもハマアトいとお妹ぢうたあく行てお足
よ 妹 「アイ今まゐる所ぐあるちよ 由 「そんなもの〜ろ 西
方とも笑く来くまるヨお祖師さまもあげるゆう
トいう戸戸さくさー出く行まづとたぐさるこの

中人當り合色の色とりと加へまたり○ちまりと山詩

新製 すみだ川名物 みやこ古名 折詰羹法 試八四生産 山嶽菓

二品とも上ものの山嶽菓

極 道明寺 製 富士ぼうろん 向島寺島新田 松花園精製 折詰重箱 進物の好染

當時向島の名物なり

こゝを作者が紀已の名所山敷巷ゝ江戸のあ
ちこちの向島より四里ゝ世の家土産に接候ようなるか
ふかきをもて実不極承精製の山口取りまたまたさて

蔵元家とお由ゝまゝも新見合なりしぶさのその
中のお由ゝ蔵ゝきとやうさんげうゝ不働さるぎいひ
そゝまゝ一身の上の貞も操も七年命り証据なれば
今さゝふやゝ流よ今ふる必竟二人ごこの産の境八
そもいろゝんものより八十七四歳よりて初るべゝ

春色梅児誉美八の巻了

婦女八賢傳

袋入 全十二冊

狂訓亭為永春水作
香蝶楼歌川國貞画

楽焼の櫛の政子形
黄木の小櫛の操形

當世娘身持扇

為永春水作
柳川重信画

この草紙八當年第一の奇作ゝゝ例の為永がおげ
やりの筆にあらびこまぶく形でも毋藏の佳本なり
もしあゆ高覧の往編本紙上ノ
物ゝ本の岡丸 文永堂主人伏稟

揚太真遺傳

上處女香

一週 百二十文

特製桐の箱入

とゝ山に茶八奉朝と金銭の城をとゝそ男女小限ら代新の艶とうるうて
ちゝて生まれ三ゝるうて日野茶ゝ元祖ゝ白ゝ
ゝゝゝ新の業世間ゝ多ゝ白粉洗粉化粧
皆ゝゝゝ新の業ゝゝゝ功紙書ゝ
筆分ゝ功紙白ゝ後ゝ山ゝ猫ゝ病ゝ四ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
明ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

207
60
2829

賣弘所

色艶ぜんとして梅のごとくなり二月の月ひのうぐいす花の枝不義の腰月も
羽二重まき絡のごとく花を薄りとるのこゝろぞ。ふきびのそばうきを雁金
の跡。あるこゝ新おしゝ跡うぐ浩りてうつくしうつくしう
洗ひたの新鮮をとりあつさうぐさ二月白梅を解する梅の乳色の多
自然花の白のこゝろうぐ花梅よりもれて梅い新いかに不及年きし白梅少
間のひとの目ふ美花美くする客法の名ひ梅ひちくの科梅きれ

真の美人とるのうぐ

為永春水精解

書物繪入讀本所　文永堂　大嶋屋傳右衛門

江戸數寄屋橋御門内　文永堂左衛門

初みぐさ

代二十六文

国立国会図書館　タイトル『春色梅暦 4編12巻』 請求記号 207-2829　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『春色梅暦 4編12巻』 請求記号 207-2829

ガラス使用